

2018年 西洋中世学会第10回大会 於東洋大学

ポスター報告要旨

報告者1*	多田 哲 Satoshi TADA
所属	中京大学国際教養学部
発表題目	インエクレスiament理論—その概要と研究史的位置付け
英文タイトル	Inecclesiamento: Its Outline and Historiography
<p>「インエクレスiament」とは、ヨーロッパ中世の定住史・教会史・考古学などで、頻繁に使用されている術語である。人口の特定地域への凝集化を説明づける理論の1つであり、2005年にM. Lauwersによって提唱された。その後10年以上が経過し、ヨーロッパ学界ではよく知られるようになった理論ではあるが、わが国の学界でこれに言及した研究は皆無と言ってもよい状況である。そこで本報告では、この理論の概要と研究史的位置付けについて、速報として紹介したい。</p>	
報告者2	飯尾 圭司 Keishi IIO
所属	名古屋大学大学院
発表題目	ヘンリ4世の対貴族政策
英文タイトル	Henry IV and the nobles
<p>ヘンリ4世(在位：1399年-1413年)は前王リチャード2世を廃して王位に就いた。ヘンリの王権は王位篡奪により成立したため統治基盤の確立が課題であり、とりわけ貴族層をいかに自身の統治に取り込むかということが重要な問題であった。本報告では、これまで関心を集めてこなかったリチャード2世の寵臣の一人ヨーク公エドワードに着目し、彼に与えられた恩顧を分析することで、ヘンリの統治政策について考察する。</p>	
報告者3	望月 滯 Ryo MOCHIZUKI
所属	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野 修士2年
発表題目	1552年のケルン市司法改革における、法専門家の役割
英文タイトル	The role of expert in the reform of courts in Cologne (1552)
<p>ケルン市における1552年の司法改革の作成過程に注目する。この改革は、ケルン市参事会の選出原理が「家柄」から学識などの「資質」へと転換するのと時期を一にし、法専門家が市政とどのような関係にあったかを考察する好例であるにも関わらず、十分に注目を受けていない。そのため、本報告では人事を分析することで、市参事会にとって、専門家はどのような役割を持ったのか、市参事会が学識者をどのように扱っていたのかを論ずる。</p>	
報告者4	樋口 諒 Higuchi RYO
所属	日本学術振興会特別研究員 (PD) / 東京工業大学
発表題目	中期ビザンティン建築におけるキプロス島の教会堂の位置づけ
英文タイトル	Characteristics of Cypriot Church Buildings in Middle Byzantine Architecture
<p>地中海の東部に位置するキプロス島には、現存するだけでも100棟以上の中期ビザンティン(7~12世紀)の教会堂が現存しており、その中にはキプロスでのみみられる建築形式も存在する。本報告では、これらの教会堂</p>	

<p>について体系的に纏め直すと共に、その特徴について周辺地域の教会堂と比較対照することにより、ビザンティン建築におけるキプロス島の教会堂の位置づけについて再考する。</p>	
報告者 5	菅沼 起一 Kiichi SUGANUMA
所属	東京藝術大学大学院／日本学術振興会特別研究員
発表題目	声楽ポリフォニーの器楽編曲方法——16世紀リュート教則本資料を中心に——
英文タイトル	Instrumental Arrangement Methods of Vocal Polyphony: A Case of Lute Treatises in the Sixteenth-Century
<p>器楽による声楽ポリフォニーの編曲・演奏は、17世紀までのヨーロッパ全土において広く実践された。そして、16世紀に音楽著作の印刷販売が本格化する過程で、その実践方法が様々な教則本・音楽理論書において記述されるようになる。本報告では、ル・ロワ(1574)、カッラーラ(1585)など16世紀のリュート教則本に焦点をあて、声楽ポリフォニーのタブラチュア編曲方法、プロセス、そして楽器固有の特質などを「原曲のポリフォニー構造の保持」という観点から考察してゆく。</p>	
報告者 6	加藤 政夫 Masao KATO
所属	学習院高等科（教諭・世界史）
発表題目	高等学校の世界史における西洋中世史—その可能性と限界—：事例⑧新指導要領を検討する」
英文タイトル	European medieval history in high school history education: Problems of the New Course of Study
<p>今年の3月30日に、高等学校の新しい学習指導要領が告示された。「世界史A・B」・「日本史A・B」から「歴史総合」・「世界史探求」・「日本史探求」へと、比較的大きな改編となる今回の学習指導要領の改訂について、高校と大学の教育現場にいる者同士が意見交換を行い、その課題や可能性を探る機会となることを本報告では目指す。</p>	
報告者 7	吉田 瞳 Hitomi YOSHIDA
所属	京都大学文学研究科西洋史学専修（D1）
発表題目	中近世ニュルンベルクにおける音の支配
英文タイトル	The Rule of Sounds in Early Modern Nürnberg
<p>ハーバーマスが提示した中世的公共は、社会的領域というよりは寧ろ社会的地位の表象だった。しかし、この「代表的具現的公共性」は、近代社会の持つ「市民的公共性」と対比・批判されるべく特徴づけられたものだった。報告者はA. ハーフナーカンプの議論に着想を得、サウンドスケープの視点から中世的な「市民的公共」の分析を試みている。ここではその一部として、都市における音の支配を、帝国都市ニュルンベルクを事例に考察する。</p>	
報告者 8	井上 果歩 Kaho INOUE
所属	サウサンプトン大学人文大学院音楽専攻音楽学博士課程2年（東京藝術大学大学院音楽研究科音楽専攻音楽文化学専攻音楽学分野博士後期課程3年）
発表題目	大学における音楽学（ムジカ）とスコラ学
英文タイトル	“Musica” and Scholasticism at Universities in the Late Middle Ages

<p>学問としての音楽「音楽学（ムジカ）」は、古代ギリシャにその起源を持つが、13世紀には自由七科の一つとして西洋の大学を中心に展開された。同時代、大学ではスコラ学、特にアリストテレス哲学が盛期を迎え、13～14世紀の音楽学論文の多くがその学問運動を反映している。本発表では、スコラ学思想・修辞法等が当時の音楽学論文においていかにして表れているか、音楽理論や記譜法とどのように関係していたのかを考察する。</p>	
報告者 9	植松 苑子 Sonoko UEMATSU
所属	東京藝術大学大学院美術研究科
発表題目	15世紀後半のポーランドにおける彫刻技術の展開に関する一考察
英文タイトル	A study of Sculptures in Poland in the late 15th century
<p>後期中世ポーランドの彫刻研究は、ファイト・シュトース（1447/48?-1533）の作品を中心に進められてきた。本報告では、シュトースが活動する以前のクラクフにおける彫刻制作に着目し、グダニスクなど北部地域の作例との比較によって、その展開の一端を明らかにすることを試みる。また、図像学的な考察に加えて、当時の交易や信仰の状況など、社会的要素が彫刻制作に影響を与えた可能性についても併せて検討したい。</p>	
報告者 10	北舘 佳史 Yoshifumi KITADATE
所属	中央大学
発表題目	13世紀後半のシトー会レ・シャトリエ修道院におけるジェロー・ド・サルの記憶
英文タイトル	The Memory of Gerald of Salles as a Founder of Abbey of Les Châtelliers in the Late Thirteenth Century.
<p>12世紀初頭に西フランスで活躍した巡歴説教師ジェロー・ド・サルは数多くの隠修士共同体を創建したことで知られる。『ジェロー伝』は聖人の墓と聖遺物を所有するシトー会レ・シャトリエ修道院で死後150年後に書かれた伝記であり、普遍的な教会改革よりも修道院のアイデンティティ形成に力点が置かれている。本報告では13世紀後半に教会の建設や巡礼地としての整備が進む修道院においてどのように創建者が描かれたのかを考察する。</p>	
報告者 11	近藤 真彫 Mahori KONDO
所属	宝塚大学
発表題目	《シトーの聖書》の詩篇挿絵研究—天上のエルサレムにおける奏楽のダビデ王
英文タイトル	Psalter Illustration in the Cîteaux Bible: King David as musician in the Heavenly Jerusalem
<p>本報告では、12世紀初頭にシトー修道院で制作された《シトーの聖書》（ディジョン市立図書館）の挿絵のなかで、詩編の著者としてあらわされたダビデ像の図像考察を行う。本作が、「ダビデ王と楽師たち」の伝統的な図像を踏襲しつつ「天上のエルサレム」を重ねることで、天と地をつなぐダビデの役割を示していることを確認し、その図像プログラムにおいて初期シトー会の修道生活の理念がどのように反映されているかを検証する。</p>	
報告者 12	阿部 ひろみ Hiromi ABE
所属	東京大学人文社会系研究科研究員
発表題目	15世紀帝国都市ニュルンベルク参事会の書簡
英文タイトル	Letters of the Municipal Council of Nuremberg in the 15th Century

<p>ニュルンベルクは、中世後期の神聖ローマ帝国において政治的に重要な大都市であった。本ポスター報告は、15世紀にニュルンベルク市参事会が毎年200通をこす書簡を皇帝や諸侯、他都市の市参事会といった都市外の政治権力やその他個人に送付し、良好な関係構築に努めていたことを紹介する。この都市は皇帝を都市君主とする帝国都市であったが、それ以外の政治権力や個々人ともコンタクトをとっていたことを帝国の政治状況とも絡めながら説明する。</p>	
報告者 13	岩永 玲 Rei IWANAGA
所属	京都大学文学研究科
発表題目	ヨークシャー北部における初期中世装飾石彫の生産
英文タイトル	The Production of Early Medieval Stone Sculptures in Northern Yorkshire
<p>本報告では、初期中世のブリテン諸島で生産された多様な文様を持つ自立式の石造記念碑・墓標（初期中世装飾石彫）のうち、特にヨークシャー北部の資料を取り上げる。従来着目されてきた形態や文様などの分析項目に製作技術という視点を加えて型式学的研究を行い、それらの生産と展開の様相およびその社会的背景について考察する。</p>	
報告者 14	安藤 さやか Sayaka ANDO
所属	東京藝術大学 教育研究助手
発表題目	形から生まれるファンタジー ——カロリング朝装飾写本の物語イニシアルに於けるテキスト・文字・図像——
英文タイトル	Form Forms Phantasy: Text, Letter, and Image in the Historiated Initials of a Carolingian Decorated Manuscript
<p>写本挿絵は、単なるテキストの忠実な図解なのだろうか。図像を文字に表す「物語イニシアル」と呼ばれる挿絵形式は、カロリング朝写本で開花した。本報告では、《コルビー詩編》（アミアン市立図書館、Ms. 18C）の物語イニシアルを例に、テキスト・文字・図像がいかに関わり合い挿絵を形成しているかを観察する。そこではテキストだけでなく文字の形もまた、ファンタジーに富んだ図像の着想源であることが明らかになるだろう。</p>	
報告者 15*	岡本 孝信 Takanobu OKAMOTO
所属	学習院大学人文科学研究科史学専攻
発表題目	エセルレッド2世期イングランドのエアルドルマン
英文タイトル	Ealdormen during the reign of Æthelred II
<p>エセルレッド2世期（978-1016年）のイングランドは、デーン人の侵攻が激化し、アングロ＝サクソン人の王からデーン人の王へと移行する時期である。このような状況において、さまざまな活動を行っていたことが史料から言及されている世俗有力者層の「エアルドルマン（ealdorman）」に注目する。今回はプロソポグラフィ研究を用いて分析を行ない、彼らがどのような人物たちであったのか、またどのような状況に置かれていたのかを検討したい。</p>	

報告者 16	高橋 香里 Kaori TAKAHASHI
所属	東京藝術大学
発表題目	中世後期ノルウェー祭壇画群から考察する西洋初期油彩技法の研究
英文タイトル	The techniques of early European oil paintings in the case of medieval Norwegian altar decorations
<p>13 世紀半ばから 14 世紀半ばにノルウェーで制作された祭壇画群には、油絵具が使用されていることが科学調査によって明らかになっている。本作品群には、金属箔の上に油絵具を塗る技法が多用されており、修道僧テオフィルスによって記された技法書の「透明な絵」という処方との類似点が指摘されている。両者を比較することを通して、初期油彩技法において油絵具の透明感を維持する工夫がいかなるものであったのか、材料学的視点から考察する。</p>	
報告者 17	秋岡 安季 Aki AKIOKA
所属	東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士後期課程
発表題目	中世イングランドのホール：修道院建築が与えた住宅建築への影響について
英文タイトル	The Medieval Hall in England: on the Influence of the Monastery upon Domestic Architecture
<p>中世イングランドにおける住宅建築では、主に食事や祝宴の際に使用されたホールが世帯の核として機能していたことが特徴である。既往研究では平面図の類型的分析が中心を占めてきたが、本報告は同時期の修道院における慣例法集やその建築、特に修道士らの食堂 (refectory) の構造や装飾、家具の配置等を参照することにより、修道院文化からの影響を探る。住宅建築史の範疇を超えて、聖俗文化の結節点としてのホールの特異性を捉えることを目的としている。</p>	

*ポスター賞エントリーなし